講　演

アメリカの宗教における抗争と創造性

*Robert Lee**

アメリカでは，神学校をはじめ宗教界に，一つの新しい傾向が広がってきているようであります。これは，抗争(Conflict)と権力(Power)との役割，機能，目的，任務への再評価に見られます。抗争と権力との現実を再評価することは，今日の出来事，とくに「人種上の正義の革命」として認識されるようになった事柄を通じて，いたってさし迫った問題になってきているのであります。

プロテスタンティズムは，伝統的に，抗争と権力の問題をとり扱う用意がありません。プロテスタント思想は，プロテスタント的個人主義の観念に結びついてきたため，権力の現実を無視する傾きがありました。さらに，アクトン卿の「権力は腐敗する，絶対的権力は絶対に腐敗する」という明言に，いとも簡単に同意してきました。しかし，今までに正典化されてしまったアクトン卿の古典的見解に対して，新しい見方をするべき時にたち至ったのであります。

まず，権力の不在，権力の完全な欠如でも，腐敗の源泉になるということです。権力を用いる手段を欠いている場合も，腐敗に向かいます。このことは，Klu Klux Klanの人種差別や，その裏返しのような黒人回教主義 Black Muslimの形態に，例証されています。さらにまた，アクトン卿の明言は，権力についての，神を考慮にいれぬ世俗的見方であります。というのは，神はある意味で，権力との関連において見られるべきだからであります。われわれは，神を全能者，最高位者，完全存在，超越的審判者として語りますが，これは権力，神の権力ではないでしょうか。そして，この権力は，腐敗した権力というアクトン卿の言葉で理解されるべきでしょうか。もしかれの権力についての理解を文字通り受けいれれば，われわれは腐敗した世界の中で自分の庭だけを耕すべきだというカンディード（ヴォルテールの風刺的寓意小説）の忠告が価値あるものとなります。たしかに，権力の世界の中で引きこもってしまうことは，多くのキリスト教徒にとっての誘惑であります。彼らは，自分の霊の領域だけを耕して，自分の魂の小さな庭から世界を閉めだしています。権力は

---

* Robert Lee 博士は San Fancisco Theological Seminary のキリスト教倫理学の教授である。教授は，*Social Sources of Church Unity* (1958) や *Religion and Leisure in America* (1964) などの名著によって，アメリカの学界および宗教界で注目されてきた宗教社会学者である。この講演は，同教授が国際基督教大学に客員教授として滞日中，1965年5月に同志社大学アメリカ研究所主催によりなされたものであり，当時のアメリカ社会の現状にそくしてキリスト教倫理の根本的問題を論じた点で，いたって興味深いものであった。その後アメリカ社会の問題は，黒人暴動やベトナム戦争の激化など，いつそう深刻化する様相を呈してきたが，この講演の中心的論点は今日でもその意義を失うものではないと思われる。あえて教授の了承をえて，講演のテープをもとに訳出した。なおこの講演に関係あるものとして，教授と Martin E. Marty との共編になる *Religion and Social Conflict* (1964) がある。また最近教授は，滞日中の研究をもとにして，*Stranger in the Land-A Study of the Church in Japan* (1967) を著わしている。

また，人間が自由を行使しうるという神の愛の表現として，みなされねばなりません。神の愛である権力は，人間が権力を善に対しても悪に対しても行使しうる土壌，あるいは可能性であります。アメリカ人気質が，伝統的に根強い反政治性をもちつづけた理由の一つは，アクトン卿の言葉に従って，政治を必然的に腐敗するものとして退けたことにあります。このことは，アメリカ人気質が，権力の神学的意味を見失ってきたからであり，そのためにまたアメリカ人気質は，権力を，自由としてのみならず，限界や抑制としても理解しえなかったのであります。宗教を，権力の概念を含まずに正しく説明することはできません。これと同様に，権力を，宗教概念を用いずに正しく理解することはできません。したがって，神学が権力の政治を考えねばならぬように，政治もまた，権力の神学を考えねばならないと言いうるのであります。

さて私は，思考の新しい方向づけ，すなわち抗争に対する新しい心構えが，いたってさし迫ったこととして認識されはじめたと申しました。この新しい態度は，人種革命などの出来事や文化的諸状況によってだけでなく，プロテスタント神学の中での内的昂揚，すなわち「世界に対する係わりの再生」によっても，促進されてきました。しかし私は，今日のアメリカの教会―あるいはその大多数―が，この世界を突如として発見したとか，ボンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer, 1906-45. ドイツの牧師・神学者として活躍し，ヒトラーへの抵抗運動のため処刑された。）のキリスト者についての定義に，突然共鳴するようになったとか言っているのではありません。ボンヘッファーが次のように言っているのを，思いだしていただきたいのです。

「キリスト者であることは，なんらか特別の意味で宗教的であることではない。キリスト者であることは，人間であること，この世界での生活において，神の苦難に参与するものたることである。人間が信じる者となるのは，この世界に完全に生きることによってのみ可能である。」

しかし遺憾ながら，このことは，アメリカにおいても日本においても，未だ絶対的真実とはなっていないのであります。

しかし私が主張したいのは，創造的な少数者，否たえず増大していく少数者が，新しい方向に踏みだしており，教会中心的なものから，この世に導かれ，この世に仕えるものへと重点が移っているということなのです。長老派教会の指導者が，市民的反抗のゆえに検挙されたことや，その教派たる長老派教会連合が，シカゴにおける公民権運動のために年間50万ドルを計上したことは，全く異例の傾向であります。ワシントンの立法者たちは，マルチン・ルーサー・キングを中心とする公民権運動の指導者たちに感銘をうけ，ゆさぶり動かされさえしました。ちょうど1ケ月前のこと（1965年4月），私の勤めているサンフランシスコ神学校の学生50名が，7名の教授たちといっしょに，バスを借切って，アラバマ州のセルマへと2500マイルの道のりを行進しました。神学校の学長が，その先頭にたちました。彼らは皆，大目的に向って，身をもって参加したのであります。直接出て行かなかった者も，その地方の中心地に向って10マイルのデモ行進をし，セルマのための基金と食料を集めました。この行為は，大信仰復興運動のように，学園中にひろまったと聞いています。この世界に向って信仰をさし示す意義ある何事かが，おこっているのです。ボンヘッファーは，かかる新しい方向づけに対する，偉大な使徒であったと言えます。

われわれがこの世界に係わりをもつのは，前衛文化などに傾倒しているからではなく，教会がこの世のために存在しているからであります。その上，この世はまた，教会のための贖いとなっているのです。中世のある僧侶が，このことを次のように言っています。「教会は，ノアの箱舟のようなものである。もし外に嵐が吹いていなければ，舟の中の人間は臭気にたえきれないであろう」と。この世界が神の世界であるゆえに，また神の言葉がこの世に存在してい

るゆえに，教会はこの世界なしにはありえないのです。今日では，精神的活力の中心は，教会からこの世へと移ってきたと言えましょう。思想においても，行為においても，教会はこの世界から指示と挑戦をうけています。この世はしだいにわれわれ教会人を目ざめさせ，この世界の方へと向かわせています。この世が教会を必要としているように，教会もこの世を必要としています。もしそうであるなら，もしこのことが現に起っているなら，すべてのキリスト者は，心をきめ，すみやかにこの世の実体をつかみ，たえずこの世と対話し，この世の中にあって耳を傾け，学び，探索し，仕え，苦しまねばなりません。この世との約束関係と，奉仕によってこの世を形成していく責任とが，証しと宣教の場となるでしょう。

オベリン大学の社会学者インガーは，彼の『宗教・社会・個人』という，広く用いられている教科書の巻頭で，自分と同じ社会学の研究者に語りかけ，次のような大胆な主張をしています。[1] 彼は，社会の研究者は宗教の研究者でなければならないと言っています。

今日の状況では，逆もまた真なりと言うのが適切であるように思われます。すなわち，宗教の研究者は，社会の研究者であらねばならないということです。われわれは，ブラウニングの「神，空にしろしめす，すべて世はこともなし」というような態度を，はや取りえないのであります。今日における宣教は，人間のいとなみの意味を認識し，社会的存在の構造を把握しなければなりません。権力と抗争にまき込まれることは，まさに，この世にあるわれわれ人間存在の主要な部分であり，キリストと文化とが対話している部分であります。それゆえに，教会が社会の闘技場の外にあるような過去の姿をたち切りたいなら，社会的抗争に対する新しい見方が不可欠になってきます。それでは，いかなる方法で，いかなる形をとるのか，すなわち，社会的抗争に対決する新しい態度はいかなる輪郭をもつのでしょうか。次に，それを簡単に示してみたいと思います。

社会的抗争とは，人間がなんらかの社会組織を形成するところには，どこにでも現われるものです。社会的抗争が存在しないところに，前進する社会をみることは，ほとんど不可能です。抗争のない社会は，死んだ社会と言うことができます。それゆえに，抗争がないという意味での，この世における最も平和な場所は，墓場であります。だれが墓場を自分の家としょうとするでしょう。好むと好まざるにかかわらず，抗争とは人間存在の現実であり，それゆえ抗争は，倫理的・社会的行動を理解するための重要な手段となるのです。

社会的抗争は人類の歴史と共に古く，たえずくり返されてきました，しかし今日は，抗争の時代と言うにふさわしい時代です。日々の出来事を見ていると，自分たちがたんにこの世に住んでいるだけではなく，激動と変革の社会に生きていることをまざまざと感じます。社会的抗争の脅威によって強い影響をうけていないような人は，ほとんど実在しません。この社会的抗争とは，国際社会・国家・共同社会・党派・集団・個人など，さまざまのレヴェルでなされています。したがって，現代の出来事は，20世紀初頭や19世紀のあい言葉である調和や安定といった平和的な考え方から，われわれを解放してくれました。われわれの時代の鍵となるメタファーは，危機・緊張・ディレンマ・権力闘争のように抗争を示す言葉であり，またこれらが，現代の核心的な争点であります。

さて，抗争とは，あい争う諸勢力による権力闘争，見解の衝突，意見の相異を意味します。これらの不可避的な社会過程は，競争，征服，強圧などをしばしば含みますが，暴力や革命を必ず含むとはかぎりません。社会的緊張やストレスは，戦闘や騒動によらないで，調和的な方法によって変革を導くこともありえます。スエーデンの社会科学者グンナー・ミュルダールは，黒人と白人の問題についての古典的大著を『アメリカのディレンマ』と題しました。そこ

1) J. Milton Yinger, *Religion, Society and the Individuals* (Macmillan, 1957)

で彼は，アメリカ国民の人間としての価値や目的と，彼らの日常生活上の実際の行動との間におこる，おさえがたい抗争について指摘していました。[2] われわれは，社会的抗争の類型と同様，人類的緊張を，必死になって無視したりごまかしたりしています。多くの人々にとって，社会的抗争とは，災難を招くものであり，避けて逃げだすべきものであり，それが論争の種となるゆえに隠蔽すべきものとなっています。

社会的抗争に係わらずに見すごして通る傾向は，根本的に権力に不信を持つ精神構造と，密接な関係にあります。もちろん，権力の潜在的悪弊を認識するという意味での，権力への健全な不信は，好ましいことであります。しかし，その結果として政治的現実から手を引いてしまうことになるなら，それはたんなる幻惑にすぎません。生活のきびしい事実に，むなしく反抗しているにすぎないのです。権力からの逃走は，常に責任からの逃走であります。抗争はもちろん，根本的な社会過程として，分裂や混乱の種子を含んでいるでしょう。しかし，抗争は，必ずしも分裂を招くとは限りません。われわれは，抗争を健全さのしるしとして，また新たなものを開き，社会正義をより多く導入するための創造的な動因としての文脈から眺めることは，めったにありません。抗争は普遍的に存在するものですが，普遍的に悪ではないのです。抗争が積極的な機能を果す場合があるのです。抗争は，社会変革や進歩的立法のための刺激剤となりうるのです。公民権闘争，社会正義のための闘争，女性の権利や団体交渉権の獲得の闘争などはすべて抗争を代償として達成されるものです。社会的抗争が，秩序ある社会変革を導びくということは，ダイナミックなプロセスとしての民主主義と軌を一つにするものです。抗争による刺激がないとき，革新はなく，社会機構は形骸化し，変転する状況に適合しえない硬直したものとなります。ですから抗争は，ただたんに恐れるべきものでもなく，またたんに歓迎さるべきものでもないのです。民主主義社会の本来のすがたは，問題がすでにおさまってしまったり，潜在しているところにあるというよりは，抗争と緊張とがおこっているところにあると言いうるのであります。

さて，一般的にゆきわたっている誤った考えとは反対に，抗争は，教会にとっても無関係ではありません。教会を神聖な共同体として，理想化する傾向があります。しかし，「地上に平和をもたらすためにわたしがきたと思うな。平和ではなく，つるぎを投げ込むためにきたのである。」とイエスが言った事実を，見逃してはなりません。パウロの手紙も，実際に現われた抗争や内にひそんだ抗争状態にみちています。抗争と論争は，初代教会における生活の正常な部分でした。教会の信条は，近年開かれた世界教会合同運動のニューデリー大会やエバンストン大会のように，各教派の代表者が平和裡に集まったところで形成されたのではありませんでした。これらの信条は，分裂と異端にみちた血なまぐさい情勢の中で，生まれてきました。さてここで，この抗争の性質と意味を明らかにしておかなければなりません。教会は解答と解決を持ちあわせた万能薬であるかのように見せかけることはできません。教会は，抗争の解決に貢献もしますが，それと同じように抗争の原因ともなります。このことを，われわれは告白する必要があるのです。

われわれにまず必要なことの一つは，宗教と抗争とが係わる領域について，研究することであります。ここで，この領域の研究におけるいくつかの分野を指摘しておきたいと思います。次の三冊の本は，明確に宗教的関心と結びついた抗争の，三つの大きな分野を示す研究であります。その一つは，イェール神学校のディーンであったリストン・ポープの『紡績工と説教者』で，この本は，その根底に経済問題—労働者，労資交渉，階級関係—が横たわる抗争に，教会がまき込まれたことに関するもので，この分野の古典的研究と言えましょう。経済上の問

2) Gunner Myrdal, *An American Dilemma* (Harper & Row, 1944 ; new edition, 1962)

題は，宗教的・社会的抗争の大きな分野です。次の本は，宗教的抗争——宗教間または宗教内の抗争——についての研究です。それは，ケネス・アンダーウッドの『プロテスタントとカトリック』で，宗教界内部の抗争について研究する場合のよい手がかりとなります。アンダーウッドは，プロテスタントとカトリックとの抗争を論ずる出発点として，産児制限問題をとりあげています。三つめの本は，エルンスト・キャンベルとトーマス・ペリィグリュー共著の『人種間の危機におけるキリスト者』です。この本は，牧師や教会指導者の行動のパターンとリトルロックの状況に対する反応とが，どのような関係にあるかを研究しています。経済状態，宗教的抗争，人種的抗争という三つの分野におけるすぐれた業績を紹介しましたが，これら三冊の本は，たんに研究の端緒で，アメリカ研究においてこの領域の研究を進める上での刺激と示唆を与えるものにすぎません。この外にも，ギブソン・ウインターの『愛と抗争：家庭生活における新しいパターン』のような，多くの研究をあげることはできます。この本は，家庭のパターンの中での抗争とその宗教的次元について書いたものです。[3)]

さて，抗争状態は非常な多様性をもっていますが，社会学者というものは，いつもパターンとプロセスに関心をもっており，そこに現われる共通のパターンを見つけようとします。社会学者は，図式化を求め，そのままではたんなる素材にすぎぬものからパターンを造り出そうとします。ですから私も，抗争の研究を始める前に必要なことは，抗争状態それ自体のダイナミックスを縮図の上で理解することだと言いたいのです。実際の抗争状態を通じて，何がおこるのでしょうか。抗争状態のダイナミックスを図式化して，抗争の過程におこる運動を調べてみますと，そこにみられる運動の方向は，ずいぶん規則的な経過をたどります。それは，特定な争点，すなわち端緒としての不一致から，より一般的な諸問題へと移行します。そして，これらの問題はつぎつぎと，新しい異なった不一致を作りだし，この不一致から，敵意と個人的攻撃へと移り変わっていきます。このようにして最後には，最初の本来の争点は忘れられ，もはや重要なものでないように見失われてしまいます。この最初の争点が，多くの抗争において，いかに見失われてしまうかは，驚くほどであります。われわれは，また特定な争点から，個人的問題へと移動し，その問題を個人的なものにもするのです。問題が多くなるにつれて，また論争に入りこむ人が増すにつれて，以前は安定していた諸関係は——それらはすべて抑圧されていた問題ですが——，その状況における均衡がくずれるので，抑制されずに表面化します。夫婦げんかはよい例です。あらゆることが，けんかにまき込まれていきます。抑制がきかなくなるのです。妻は，夫が5年前にやったことを思いだします。以前はおさえられていた問題が，むき出しになります。これと同じことが，共同社会のレベルにおいて大規模におこるのです。

争点の実体が存在しないときには，論争はきびしい敵意にみちた個人攻撃となり，強烈な憎悪，怒り，暴力が現われます。われわれは，共同社会における多くの抗争状態の中で，この例証をいくらでも見ることができます。最初の段階として，敵対する陣営，あるいは社会関係の対極化がひきおこされ，両側の人々は互いに交わりを断ち切り始めます。次に，運動を組織する手段が作られ，いわゆる100人委員会とか10人委員会ができ，請願運動など多くのことが行なわれます。伝達のチャネルができ，集会が開かれ，パンフレットがくばられ，基金が集められ，旗印やスローガンが決められます。次によくあることは，新しい指導者の出現です。外部からきたデマゴーグが紛争の中に入ってきま

3) Liston Pope, *Millhands and Preachers* (Yale, 1942); Ernst H. Campbell and Thomas F. Pettigrew, *Christians in Racial Crisis* (Public Affairs, 1959); Gibson Winter, *Love and Conflict: The New Pattern in Family Life* (Doubleday, 1958).

す。アウトサイダーというものは，熱狂をかりたてるものです。アメリカの人種差別廃止の論争において，この実例がよく見られます。この論争の指導者の一人であるジョン・カスパー（John Casper）は，南部へ行って，反黒人の弁舌をふるいました。彼はいたるところで集会を開き，黒人への憎悪感をかりたてました。このカスパーという人物が，かつてグリニジヴィレッジで一人の黒人と本屋を経営していたことは，ほとんど知られていません。彼は私の友人に，いつか自分の名前を新聞の見出しにのせてみせると，語ったことがありました。そして彼は，それをなしとげたのです。こうして新しい人たちが，紛争に入りこんでいきます。彼らは，おそらく，「ある運動がおこっているのに気がついたら，すぐその先頭に立て」という命題に従っているのです。このように論争が嵐を呼ぶと，ますます多数の人々が紛争にまき込まれます。多くのかたい保守的なグループ，たとえば教会，P. T. A.，市民クラブ，実業家団体なども，結集してきます。彼らは宥和，緩和，制限，調停といった効果を与えます。また彼らは，強制力をふるうこともできます。

さてわれわれは，論争の共通のプロセス，とくに共同社会における論争のプロセスを検討するときに，教会の役割について認識しなければなりません。私はこの教会の役割が二面性をもつことを主張したいと思います。一方において教会は，正義のために，抗争を助長する予言者的役割をになっています。他方教会は，秩序のために，抗争を行きすぎからまもり，それを緩和する牧者的役割をになっているのです。そしてこの二つの役割は，しばしばそれ自体相いれないものとなるのです。

最後の一つの問題は，緊急に，抗争に「社会性をもたす」（civilize）ことであります。一瞥したところ，「社会性」（civility）と抗争は，なんら共通の概念を持たない言葉のように思われるかもしれません。しかしながら，「社会性」とは，抗争関係にある人々に「社会性をもたす」努力として，すなわち正義に基づく社会機構と文化的機会とを求める多くの人々の間の対話として，見ることができます。民主主義は，暴力による破壊を自ら求めることはできませんが，社会の多元性と多様性を促進することができるのです。またここに，アメリカの多元性と国家目標について論ずるにあたって注目されてきた，共通の関心点があるのです。いかなる伝統や集団といえども「社会性」への鍵を握っているわけではありませんから，多元的社会は，コンセンサスの巾広い枠組みの中で，抗争を通じてのみ発展していくのです。これが責任ある自由を拡大していく，唯一の方法なのであります。この創造的抗争のプロセスをとくに切りくずしていくものに，次の二つの反応があります。一つは，文化的ファンダメンタリズムであり，いま一つは正義と安全感の混同であります。文化的ファンダメンタリズムとは，現代の文化的変動によって形づくられた社会的・文化的転換過程に対する，旧来の中産層，すなわち既存の社会階級が示す反応です。19世紀の中産層と同一視される伝統的価値は，象徴的に脅やかされ，地位をめぐる反動的性格の抗争となります。敬虔，倹約，両親によるしつけ，個人主義等は，世俗的合理性，放縦，平等な家族関係，公的機関への経済的依存などの，規範的価値づけによってとって代わられています。アメリカの極右にみられるような反動は，反多元的な政治的ファンダメンタリズムです。このような極端な立場は，市民的自由といった基本律を妨害しようとしています。すなわち，多元的社会において抗争に「社会性をもたす」基本律を，陥しいれようとしているのです。

いま一つの反応は，安全感を規準にすることです。この立場から見れば，変革の様相はほとんどすべて，不正かつ非合憲であり，個人の自由への侵害であります。このように，公民権の運動の昂揚において，中産層は正義と安全感とをよく混同しています。「社会性をもたす」過程は，ダイナミックな正義の表現として，広範な現状変革を要求します。抗争に「社会性をもたす」ことこそ，暴力革命にかわる唯一の道で

あります。

私はいくつかの問いで，この話をおえたいと思います。われわれは，急速な変革と現状維持の両方の利点にあずかることができるでしょうか。社会的抗争の新しい可能性にたち向かい，それらの可能性を公共の福祉の絶えざる創造的形成に用いるために，人間としての健全性，倫理的理想主義，公共の理解を持とうとしているでしょうか。

（訳　同志社大学文学部助教授　大下尚一・同志社商業高等学校教諭　中村幸久）

同志社アメリカ研究

第 4 号

フランクリンの宗教——その理神論と道徳的実践を中心として（明石紀雄）

フォークナー文学にみる文明像——特にフレム・スノープス系列の人物たちにみられる "Vision of evil" の展開をめぐって（千葉哲郎）

1950年代後半における「経済成長政策」追求の論理——アイゼンハウアー政府の財政政策思想（西川　宏）

両大戦間のアメリカ外交（麻田貞雄）

書　評

随　想